機動戦士ガンダムZZ外伝～オルトロスの翼～

エス氏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀００８８年、連邦軍に内紛を引き起こしたグリプス戦役の終結とともに、地球圏は連邦軍とネオ・ジオンに分かれた抗争……第一次ネオ・ジオン抗争へと追い込まれた。

多くの将兵を失い、疲弊しながらもそれを迎え撃つ連邦軍。片やアクシズと共に飛来した盟主ハマーン・カーンと、配下となる者達によって組織された『ネオ・ジオン』。グリプス戦役で疲れ切った地球圏は、再び泥沼の如き戦いを強いられることになってしまう。

そんな戦いの傍では、とある小さな物語が進行し始めていた……

これは、戦火の中で戦い続けたとある部隊の物語……

目次

Phase—00 Prologue ―― 1
Phase—01 The First Part ―― 5
Phase—01 The Last Part ―― 36

Ｐｈａｓｅ—００　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

宇宙世紀００８８年２月　サイド２宙域

漆黒の宇宙を、巨大魚を思わせる幾つもの影がゆっくりと横切っていく。

地球連邦軍の有する〝サラミス級航宙巡洋艦〟である。

眼前の全天周モニターには、無数に飛び交う光芒が花吹雪の様に咲き乱れていく。その光景をバイザー越しに捉えながら、コックピットに座った青年はゆっくりと息を吸う。

自分の身体に纏った濃紺のノーマルスーツとヘルメット。その右肩に刺繍された、鷲を模った白地の鋭角的なマークを思い浮かべる。その思考が、青年の意識を夢見心地から鮮明に覚醒させていった。

『総員、傾注せよ』

それと同時に、コックピットに女性の声が響いてきた。

同時に、全天周モニターに２つの顔が映し出される。

『聞きなさい、この戦いは我々の存亡をかけた最終決戦となるわ』

左の画面の奥には、濃紺の軍服を纏った怜悧な雰囲気の女性がこちらを見据えている。先刻の冷静さを秘めた声は、この女性が放ったものだった。

切れ長の形をした深緑の双眸が、自分の顔面を鷲掴みにして離さない……そんな風にさえ思わせる雰囲気が、モニター越しにひしひしと感じられた。

『我々ティターンズは、何のためにこの宇宙（そら）にいるのか……何のために地球に存在するのか……我々は今、アースノイドとスペースノイドの存亡をかけた分水嶺に立ち会っている。今一度我等の存在意義を噛み締め、そして再び起つのです』

左の画面からの声が一旦やむと、今度は右側に表示された画面から別の声が響いてきた。今度は凛とした気の強そうな声色だった。
『随分と緊張しているのね……でも、姉様の言った通りよ。私達はテロに屈してはならない。ティターンズの名に懸けて、これ以上反連邦勢力（エゥーゴ）のいい様にさせるなんて許せないわ――――今一度、貴方達にも頑張って貰うわね』
右の画面に映っているのは、濃紺のノーマルスーツを纏った女性パイロットの姿。自分達を今まで引っ張ってきた隊長である。

「……承知しています。例え堕ちたと言えど、我々にも譲れぬものがある」
気が付くと、青年は2つの画面に向かって神妙な口調で呟いていた。
『フ……言う様になったわね、アルギス少尉』
右の画面に映る隊長は、猫の様に目を細めてクスリと笑う。左の指揮官風の女性も、思わず口元を綻ばせていた。
会った頃と変わらないな……と微かに思いながら、青年は2人の上官を静かに見つめていた。
『その譲れないもののためにも、ここで斃れる事は許しません。何があろうと、生きて戦い抜くのです』
やがて……隊長は檄を飛ばす様に、そう呟く。
それと同時に、青年は右の拳を己の心臓の位置にグッと押し当てていた。
「――――了解」

程無くしてモニターにシグナルサインが表示される。
自分の乗っている褐色の機体。甲板に佇むそれを固定したロックが解除された合図だ。このまま機体を起動させれば、乗機はサラミスから離れて青年の操縦に委ねられるだろう。
まるで昆虫を無理矢理二足歩行にした様な異形の機体……自分の機体を、彼は慣れた様子で起動させていく。同時に、サラミスからも

発艦の合図が発信された。

「そうだ――――俺達は、負けるわけにはいかない……負けてなんかいられないんだ――――――！」

しかし……モニターから2人の顔が消えた時、青年は徐にそう言っていた。

意識が鮮明であるにも拘らず、その口から放たれたのは、まるで地の底から響く様な低い声。

さながら、何か過酷な運命に翻弄された哀れな虜囚の様に、絶望と悲しみと苛立ちが混ぜこぜになった様な……感情の見えない不気味な声で、青年は視界に広がった宇宙の光芒を睨みつけていた。

（今の俺がいるのは彼女達のおかげだ……あの人たちの為にも、退くわけにはいかないんだ――――――！）

幸い、あの2人が今の自分の心情に気付いた様には思えない。恩人と言える彼女達に、こんなすり減った自分を見せたくは無かった。

パイロットのそんな思惟を感じ取ったように、褐色のモビルスーツ……RX―110”ガブスレイ”が、コックピットに響く言葉に呼応する様に小さく…しかし、確かに鳴動していた。

「こちらカラベラス02、第6小隊所属、リョウト・アルギス少尉……”ガブスレイ”、出撃るッ！」

宇宙世紀0088年、ジオン残党の根絶を標榜する軍閥組織「ティターンズ」と、ティターンズ支配の連邦に抵抗する反連邦派閥、エゥーゴによって引き起こされた地球連邦の内戦……通称「グリプス戦役」は、同年2月に敢行されたメールシュトローム作戦を機に終結した。

これにより、一時は連邦の軍上層部を席巻していたエリート部隊であったティターンズは完全に凋落。だが、時同じくしてこれまで第三

勢力として兵力を温存していたジオン残党の勢力が自らを「ネオ・ジオン」と標榜して宣戦布告を開始した。
混迷を極めつつある世界は、アクシズと共に襲来したネオ・ジオンと連邦との戦い……後に『第一次ネオ・ジオン抗争』と呼ばれる争乱へと引き継がれていく事になる。

そして……それから幾許かの時が流れた……

Ｐｈａｓｅ—０１　Ｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ　Ｐａｒｔ

宇宙世紀００８８年５月４日　北米大陸

太陽の照りつける乾いた大地を、幾つもの巨大な影が疾駆する。

かつての戦争において、地球連邦の敵であったサイド３コロニー群……旧称『ジオン公国』が戦線投入し、これまでの兵器バランスを大きく覆したとさえ囁かれる鋼鉄の巨人……人型機動兵器『Ｍ（モビル）Ｓ（スーツ）』である。

その数６機。

彼等は言いようのない怒りと怨念を秘め、眼前の敵を喰らい付くさんと突き進んでいた。

その目前、廃墟と化したビル群に、幾つか別のＭＳが機を伺う様に潜んでいた。

「まさかパトロールしていたらこんなのに出くわすなんてな……しかも６機もいるなんて聞いてねぇって」

地球連邦軍で広く使われている量産機、ＲＧＭ—７９Ｒ”ジムⅡ”のパイロットが面倒臭そうにつぶやく。

「宇宙の奴等の活動が活発化してるせいで、こっちの奴らも火が点いちまってるってのかぁ？」

「あちらさんは殺る気みたいだぜ、クソ！残党共が!!」

僚機が油断なく手持ちのマシンガンを構えて、迫ってくる機影に機首を向けていた。

数か月前、突如として地球連邦に宣戦布告した大規模なジオン残党勢力…通称『ネオ・ジオン』。

彼等はさきのグリプス戦役で疲弊した連邦軍に対して温存した戦力で侵攻。多くのスペースコロニーを瞬く間に掌握していた。

そして、これに伴って地球の各地に潜伏していた残党達が日を追うごとに活発化していく現象が起こり始めていた。

この北米はまだネオ・ジオンの影響で火の点いた者達はそう多くな

い。しかしアフリカやアジア地域などでは、これまで身を潜めていた彼等が苛烈な抵抗活動を始めているのが現状である。
当然、地上の連邦軍もこれに暫時対処しなければならない。
「……おいアルギス准尉、出番だ。さっさと立って奴等をブチ殺して来い」
程無くして、隊長機と思しき”ジムⅡ”が真後ろの機体に先行する様に促す。それを受けて、身を屈めていた灰色の機影がゆっくりと立ち上がっていた。
「”ザクⅡ”3機、”ドム”タイプが3機……意外に充実しているな」
灰色と濃いブルーのツートーンカラーに彩られたMS、RMS－179”ヌーベル・ジムⅡ”のコックピットの中で、青年は淡々とした調子で呟いた。
後方には、白と赤のカラーリングが施された機体が5機、息を潜めて蹲っている。いずれも友軍の”ジムⅡ”だ。だが、青年の機体がよく見える場所に佇んでいるのに対し、他の機体はビルの影や瓦礫の傍に潜んで出て来ようともしない。ならば遠距離武器で支援を狙っているかと思えば、そんなものを展開している機体は殆どいない。精々先頭の3番機が手持ちの「ジム・ライフル」を油断なく構えて様子を伺っているくらいだ。
彼等はまるで、灰色の1機だけを囮にしている様な歪な配置を見せていた。
「……こちら第1分隊長、リョウト・アルギス准尉。目標を殲滅する」
そんな味方の動きにも眉1つ動かさず、青年……リョウト・アルギス准尉はただ静かに操縦桿を動かした。
＊
「何だあれは？」
砂煙を上げて先頭を直進する”ドム・トローペン”。そのコック

ピットのモニターに映った映像を見て、パイロットは思わず首を傾げる。
「たった1機で出てくるとは……バカにしてんのか、それとも相当腕立つのかぁ？」
『よく見ろ、あいつ普通の”ジム”じゃないぞ』
　僚機からの通信に目を凝らすと、眼前の灰色の機体は連邦軍の〝ジムⅡ〟じゃない。持っている得物も通常の９０ミリマシンガンやジム・ライフルではなく、砲撃武装のハイパーバズーカだけだ。
『”後期型ジム”か!?』
「どっちにしろ叩いてやる！」
　一瞬驚いた様だったが、すぐに各々が態勢を立て直して前進する。
『乗ってんのが野郎だったらすぐ殺せ！女だったら拉致れ!!』
　背後の”ドム・トロピカルテストタイプ”からそんな掛け声が聞こえる。
　狩りの始まり――――――
　そう言わんとばかりに、ジオン残党軍は一斉に動き出した。

＊

　最初に動いたのは敵方の”ドム・トローペン”だった。。
　灰色と濃いブルーの機体を目前に捉えた瞬間、すかさず手にしていた大型のバズーカ砲をぶっ放す。
　放たれたロケット弾は、噴煙の軌跡を描きながら目標へと向かっていった……が、”ヌーベル・ジムⅡ”は狼狽える事無く手にしていたバズーカを構える。それと同時に、砲身から榴弾の閃光が閃いて敵のロケット弾に直撃、誘爆させる。
　誘爆したロケット弾が爆炎を周囲に撒き散らす。瞬間、その煙を突っ切って灰色の巨躯が”ドム・トローペン”の前に躍り出ていた。
　同時に、左手で背中から突き出ている突起状の部分を掴んで引き抜く。
「遅い……」

引き抜いた突起から噴き出しているのは、明るい黄金色に煌めいた光の線。”ヌーベル・ジムⅡ”はそれを剣の様に構えると、面食らった”ドム・トローペン”に向けて無造作に突き出した。
”ジム”系統に標準装備される剣撃武装「ビームサーベル」。今”ヌーベル・ジムⅡ”が構えているそれが、敵機を串刺しにしてしまっていた。
「ドム1機撃破……っと、ついでに！」
そのまま灼熱の刃を引き抜くと、右手に持ったバズーカを横溜めに構える。そして、今度は肉薄してきた”ザクⅡ”の腹部に直撃弾をお見舞いしていた。

＊

『”ヌーベル・ジムⅡ”、敵ＭＳ２機を撃破』
開いた回線から、そんな声が聞こえる。僚機の”ジムⅡ”からの通信だ。
「兄さん……」
小さくそう呟いて、茜色の髪の少女は徐にコンソールに手を伸ばした。それに呼応する様に、彼女の”ジムⅡ”が持っていたジム・ライフルを構える。
『３番機、勝手な行動はするな！』
しかし、分隊長らしい”ジムⅡ”が彼女の機体を制する。
「でも…これではアルギス准尉が危険です！単騎であれだけの数を相手なんて――――」
いくら”ヌーベル・ジムⅡ”のスペックが”ジムⅡ”より高いと言っても、多勢に無勢。今は優位であってもそのうち押し切られてしまうかもしれない。
『なに、心配には及ばん。かの高名なアムロ・レイも１２機の”リック・ドム”を単騎で迎撃したというではないか』
『そーそー。それに、あいつは元エリート様なんだぜ。俺ら一般兵が

行っても足手纏いなんだとよ』
回線の部隊用チャンネルが繋がっていたのか、別の機体のパイロットが分隊長に相槌を打つ。残りの数名も押し黙ったように沈黙して答えようとしない。
「そんな……」

＊

「残り４機……全く、無茶を言ってくれるな」
瞬く間に２機のＭＳを血祭りに上げた”ヌーベル・ジムⅡ”は、続いて向かって来る４機の敵機にゆっくりと向き直っていた。
両足で疾駆してくる２機の”ザクⅡ”と１機の”ドム”は、マシンガンをバラバラと乱射しながら向かってくる。瞬く間に跳弾が大地を抉って大きな土埃を舞い上げた。
「っ!!」
”ヌーベル・ジムⅡ”を駆る青年は、咄嗟に機体を踏んばらせて左手のミドル・シールドを構える。
同時に、そのシールドの表面に何かが着弾した様に爆発が生じた。遠距離から狙っていた”ドム・トロピカルテストタイプ”が持っていたバズーカを撃ったのだ。
とっさの機転で直撃は避けられたが、ロケット弾による衝撃を完全に相殺できずによろめく。それと同時に、残る残党機が”ヌーベル・ジムⅡ”目掛けて殺到し始めた。

先行して駆けだした”ザクⅡ”が手斧（ヒート・ホーク）を抜き、同時にスラスターで跳躍を掛けながら振りかぶる。しかし、それを見逃すリョウトではなかった。
「っ……舐めるなぁ!!!」
すかさずスラスターを噴射して踏ん張ると、”ヌーベル・ジムⅡ”は左手のミドル・シールドを構える。そして、それをコックピットの

ある胴体に向けて勢いよく突き出す。
グチャッ!!!
目前に迫っていた”ザクⅡ”は慌てて立ち止ろうとするが、それを避けきれず、シールドの先端がコックピットに食い込んでいく。そして……金属と水気の詰まった「何か」が潰れる様な嫌な音を立てて、そのまま崩れる様に大地に横たわっていた。

（……くそっ、何て気分にさせるんだ！）
正直、こんなのは聞きたくないし見たくもない。
生きたものがプレスされてそのまま挽き肉（ミンチ）と化す瞬間は、ひとたび想像してしまうと悍ましい事この上ないのだ。
ひしゃげた先端が赤黒く染まるシールド。吐き気を覚えながらもそれを一瞥し、青年はそのまま無造作に投げ捨てた。

しかし、
ドォン!!
「ぐっ!!」
動きが鈍った瞬間を見計らったのか、途端に残る”ザクⅡ”と”ドム”が一斉に持っていた機関銃で”ヌーベル・ジムⅡ”を狙い始める。
たちまち肩アーマーは砕け、胴体にも着弾による無数の火花が舞い始めた。持っていたバズーカも機関銃の直撃で砲身が瞬く間に穴だらけになってしまう。

＊

『よし、頃合だ。奴が弾除けになっている隙に後退して態勢を立て直す』
集中砲火に晒される”ヌーベル・ジムⅡ”。被弾したバズーカを誘爆する前に投げ捨てるのが確認できたが、遠くに身を潜めている４機

の”ジムⅡ”は助けるようなそぶりも見せずただ遠巻きに眺めているだけ。
前方の同胞を弾除けにして撤退する腹づもりなのが、少女に手に取る様に理解できた。
（……もう限界よ！）
しかし、最前列にいた1機が不意にスラスターを噴射して加速する。その先にいるのは、今まさに孤軍奮闘を強いられている”ヌーベル・ジムⅡ”の姿だった。
『3番機、何をしている!?戻れッ！』
「これよりアルギス准尉の支援に移ります！」
隊長機からの怒声が聞こえるが、耳触りとばかりに少女は回線を切断。そのままジム・ライフルを構えると、眼前に向けてトリガーを引いた。
「兄さん、離れて!!!」
それと同時に、少女は回線で呼びかけながら”ヌーベル・ジムⅡ”の姿を視界にとらえる。
ガン！ガン！ガン！
金属が砕ける甲高い音がしたと思うと、今まさにヒート・ホークを振り下ろそうとした”ザクⅡ”が脱力したように崩れ落ちた。
それを見ていた残りの”ドム”と”ドム・トロピカルテストタイプ”の2機は、不意に現れた増援に一瞬怯んだものの、すぐに気を取り直して得物を構える。今度の武器は、背中に装備していたヒート・サーベルだ。
『アレイアード軍曹…助かった。だが離れていろ、奴らは俺が……』
”ヌーベル・ジムⅡ”からは、少女を心配する様な声が聞こえる。しかし、
『今だ、全軍突撃!!』

途端に、分隊長の掛け声と共に、今まで隠れていた白と赤の”ジムⅡ”４機が２機の”ドム”に狼の様に襲い掛かってきた。
『この機を逃すな、一気に畳み掛けろ！』
突然の動きに不意を突かれた”ドム”は、慌てて得物を構える。が、遅かった。群がる様に接近する”ジムⅡ”を捌く前にビームサーベルで突き刺され、マシンガンで蜂の巣の様に撃ち抜かれて弾け飛んでいく。間もなく、残っていた２機のＭＳは燻った鉄の残骸へと成り果ててしまっていた。

『流石だよ、アレイアード軍曹。君の見極めのお陰でこちらも大金星、お父上も喜ぶだろう』
聞こえてくるのは、第２分隊長の歯が浮く様な賛辞。
『それに比べて、アルギス准尉……何なんだね、その体たらくは？何故もっと効率よく殲滅できない？お陰で義妹（いもうと）に多大な迷惑をかけているんだぞ』
かと思うと、今度は”ヌーベル・ジムⅡ”目掛けて辛辣な言葉を叩きつけてくる。
『……申し訳ありません、第２分隊長。以後、善処します――――――――後始末は、こちらにお任せください』

だが、途端に”ヌーベル・ジムⅡ”の灰色の躯体が顔を上げる。そのセンサーが、後方から捕捉した何かを補足していたのだ。
後方の岩陰からメガ粒子の火線が走ったのは、ちょうどその時だった。
『うわ!!』
分隊長機は慌ててかわそうとするが、一瞬間に合わずに右腕から先がジュッと音を立てて消し飛ばされていた。

「全機散開！」
咄嗟にリョウトが回線を開いて指示を出す。それを受けた他の”ジムⅡ”が慌ててその場から散らばっていった。

現れたのは、”ザクⅡ”を彷彿とさせる、しかし先程の”ザクⅡ”や”ドム”よりも目新しい印象を受ける緋色のＭＳだった。
ジオン系特有のモノアイ、左肩のスパイクアーマーと右肩の盾状の装甲、背中には大型のバックパックを備えたその機体は、かつてティターンズで運用されていたＭＳ、ＭＳＡ―００２”マラサイ”である。
その手には、細長い大型のライフルが握られている。先程の狙撃はこの銃によるものらしい。
「やはりな……ティターンズの残党が、此処まで墜ちたか……！」
今まで無機質だったリョウトの声色が険しくなったのは、ちょうどその時だった。
同時に、スラスターを一気に噴射して”ヌーベル・ジムⅡ”は”マラサイ”の目と鼻の先まで一気に距離を詰めていった。
前方の”マラサイ”も狙撃体制から起き上がると、素早く手持ちの銃……フェダーインライフルを逆手に持ち換える。
それと同時に銃身の尻にあたる先端部からビームの刃が展開。”マラサイ”はすかさずその刃を抜き放つ。
一瞬の後、２機は光刃を閃かせて激突していた。

＊

「くそっ、エゥーゴに尻尾を振った犬が！」
”マラサイ”のコックピットで、黒いノーマルスーツをラフに着た男は怒りの声を上げていた。
彼はジオンの人間ではない。
その正体は地球連邦軍の人間であり、れっきとしたアースノイドであった。

それが何故、同じ連邦軍と戦っているのか……

「どいつもこいつも俺をコケにしやがって、今まで誰がお前等を守ってやったと思ってんだッ!!!」

彼は、かつて連邦軍に存在したエリート部隊の人間であった。
だが、その部隊は苛烈な弾圧や横柄さが災いして反連邦勢力との抗争に突入。結果として壊滅させられている。

行き場を失った彼と”マラサイ”が行きついたのは、かつて弾圧の対象であったジオン残党であった。

今や後ろ盾すらなくなってしまった彼と、戦力の増強を望むジオン残党。双方の利害が一致した末に迎えられることにはなった……だが、実際はどうだ？
つい最近までアリを踏みつぶす様に駆逐し、見下してきた者。スペースノイドに言わせれば、本当の仲間として迎えられる要素などあるわけがない。
それがずっと過酷な生活を強いられてきた残党達なら尚の事だ。
彼と共にやって来た機体……”マラサイ”を操縦できるのが彼しかいないからこそ同行を許されているが、実際に取り巻く状況は「針の筵」。嫌がらせや無視、腹いせのリンチなどこの数ヶ月で嫌という程味わっている。
もし自分の機体を使えるパイロットが向こうにいるなら、とうの昔に撃ち殺されてゴミみたいに捨てられていただろう。
だからといって、残党共を怒りにまかせて殺してしまうわけにもいかない。
こいつらを失えば、明日からまた浮浪者の様に北米を彷徨うだけの生活が待っている。

宇宙の元同胞達は、一部はアクシズから飛来したネオ・ジオンに迎合してその傘下に迎えられたと聞く。それ以外にも、情状酌量のおかげで本家である連邦軍に復帰できた者だって少なくない。

しかし、そいつらは高い腕前を買われたか世渡りの術に長けていたか、大抵はそんな連中ばかりだ。機体性能にばかり頼って、しかも部隊の意向を傘に来て好き放題していただけの自分を快く迎えるところなどありはしない。

それがわかっているからこそ、憤懣たる感情が全身を支配していく。

まずは目の前のコイツからだ。

たとえ細切れにしようが中のパイロットを引きずり出して惨たらしく肉塊にしてしまおうが、この憤懣は収まる事は無い。が、相手は臨戦状態なのだ。

いい度胸だ、叩き潰してくれる！

＊

本来なら、”マラサイ”は”ヌーベル・ジムⅡ”や”ジムⅡ”よりも新型。出力も反応速度もそれなりのものがある筈だ。それに、先刻のダメージも決して小さくない。”ヌーベル・ジムⅡ”単騎で挑むのは、一見すると自殺行為に他ならない。

だが、

バチュッ!!

甲高い破裂音がしたと思うと、灰色の機体は”マラサイ”の振り下ろすフェダーインライフルの光刃を真っ向から受け止める。そればかりか、逆に押し返そうとしていた。

”ヌーベル・ジムⅡ”は、元は一年戦争後に開発された実験機、ＲＧＭ―７９”パワード・ジム”の流れを組む少数生産機である。同時に、後にグリプス戦役で活躍する”マラサイ”やＭＳＡ―００３”ネモ”といった００８７年代主力機の前段階に当たる機体でもあった。

そして、”マラサイ”と同じ高出力ジェネレーター（１７９０ＫＷ級）を搭載しているため、単純な出力においてはほぼ互角と言えた。

とはいえ、”ヌーベル・ジムⅡ”は既に幾つも被弾しており性能は万全といえない。対して”マラサイ”は装甲が土埃で黄土色に塗れていたが、目立ったダメージは見られない。

このまま拮抗すれば、ダメージの残っている”ヌーベル・ジムⅡ”が不利になるのは誰の目に見ても明らかだった。

しかし、途端に灰色の機体の背中から噴射の光が迸る。再びリョウトがスラスターを噴射したのだ。

一瞬遅れて”マラサイ”が踏ん張ろうとするも、それと同時に”ヌーベル・ジム”の剣がフェダーインライフルの光刃を徐々に押し返し始めていた。

リョウトの駆る灰色の機体は、新旧の差や負っているダメージなどものともせずに”マラサイ”と拮抗していく。敵はそれに焦りを感じたのか、開いていた左手で肩のビームサーベルを構えようとした。

が、途端に”ヌーベル・ジムⅡ”の側頭部からバラララッと小気味よい音と小さなマズルフラッシュが明滅した。側頭部に設けられていた迎撃バルカンを放ったのだ。

不意打ちを食らった”マラサイ”はこれを避けきれず、モノアイ部分に直撃。顔面から煙を噴いて仰け反る。

『ギャ!!』

不意打ちで回線を開いてしまったのか、悲鳴じみた声が入ってくる。恐らく、前方の”マラサイ”のパイロットだろう。

「同じ組織にいた者とはいえ、敵となるなら……悪いが、始末させて貰

う」
それと同時に、リョウトは誰にも気づかれないようにそっと回線を開いた。
その声は向こうにも聞こえていたらしい。”マラサイ”も、ボロボロの顔面を”ヌーベル・ジムⅡ”に向けて硬直していた。
『き、貴様、まさか同じ――――』
「そうだな…だが、既に『ティターンズ』は無い。そして貴様の帰る場所も――――」
『こ、この…犬がァ!!!』
激昂したのか、途端に”マラサイ”はフェダーインライフルとビームサーベルを両手に構えてたたらを踏む。しかし……
「これで終わりだ」
同時に、フェダーインライフルを握った右腕が宙を舞い、ゴシャッと音を立てて地に落ちる。斜め上に切り上げたビームサーベルの斬撃が”マラサイ”をの右腕を切断し、その胴体を袈裟斬りにしていた。

「……敵ＭＳ全機撃破、状況終了」
崩れ落ちる”マラサイ”を一顧だにせず、リョウトは先程と同じ淡々とした口調で回線越しに報告する。
『フン……お疲れ様』
聞こえてくるのは第２分隊長の声。労う……よりも、寧ろ吐き捨てる様な口調で接してくる。他のパイロット達も、皆一様に押し黙ったまま踵を返して後退していく。
分隊制を取っている様だが第１分隊は事実上、リョウト１人の隊。残る”ジムⅡ”は全て第２分隊の機体であった。
最も、リョウト・アルギスにとってはそれは既に慣れた事であったが……

「……犬、か……」
コックピットの中で、リョウトは自重する様に呟く。
彼の視界には、先程まで自分を殺そうと向かってきていた”マラサイ”が無残な骸を晒して横たわっている。
振り下ろしたビーム刃は胴体と右腕を完全に溶断しており、その線上にあるコックピットは無残にも原形を留めないほど融解していた。もはや乗り手がどうなったかなど、想像するまでもない。
「確かにな……目先に惑い、挙句に敗北して英霊にすらなれなかった死に損ないなんだよ――――俺も、貴様も」

ただ、3番機のコックピットに座る少女がギリ……と唇を噛み締めている事は、リョウトを含めた誰も知る由も無かった……

＊

数時間後、北米大陸エルスワーズ基地
夕暮れが大地を染め上げる頃、数機の”ジムⅡ”が基地内に帰還する。
その一団から少し遅れてやってくるのは、リョウトの駆る灰色（ヌーベル・ジムⅡ）の機体であった。
「うちの隊とティターンズ様の御帰還だ！整備班、配置に着けぇ！」
整備班長の怒号が響く中、帰還した機体が次々にハンガーに配置されていく。灰色の”ヌーベル・ジムⅡ”も、入り口に程近いハンガーに無事におさまった。
「おい見ろよ、あの野郎降りてきたぜ」
「何か今日はいつにも増して暗くねぇか？」
「”ヌーベル・ジム”がこんなになっちまってるんだ。こりゃ相当ヤバかったんじゃねぇかなぁ」

整備班や僚機のパイロット達が、濃紺のノーマルスーツとヘルメットを纏ったパイロットに対してコソコソと呟いていく。
勿論、それは陰口。戦果を立てている以上、表だって文句を言う者は殆どいない。だが、かつて悪名を馳せたティターンズに所属していた彼に対して好意を持っている者などいるだろうか……
答えは否。
さきの大戦における『負の遺物』である彼等は、大多数の者からはそれなりの敵意を持たれているのが現状であった。

「ふぅ……」
暫く悪意溢れる澱んだ空気に晒された後、彼は誰にも悟られないように人気のない倉庫裏に辿り着いた。そこでようやくヘルメットを脱ぐ。
露わになったダークグレーの短髪と、身体にこびり付いた汗の粒が夕方の空気に晒されて飛び散った。ビジュアルを見る限りは中性的な風貌の青年の顔だったが、それには似つかわしくない憂いの表情が暗い影を落としている。
「……否定はしないさ。ティターンズの事は……」

＊

宇宙世紀００８３年、連邦軍が宇宙要塞ソロモン（現在はコンペイトウと呼ばれている）で行った観艦式は、大規模なジオン残党である『デラーズ・フリート』によって壊滅の憂き目にあった。その後、当時准将であったジャミトフ・ハイマンの意向で設立されたのが、対ジオン残党の掃討、制圧を目的とした大規模特殊部隊『ティターンズ』であった。
連邦軍内部では選りすぐりの精鋭部隊と言われ、当時の軍人達からは憧憬、羨望の目で見られていた事さえある。
しかし、いつからかジオン残党の摘発を名目に強引な行為を行う様

になり、それに伴って一部の者達の驕り高ぶりも目立つ様になっていった。
　そればかりか、バスク・オムを筆頭とした急進派幹部の台頭に伴って活動もより過激なものへと豹変していった。しかも、その対象にされたのは……本来ならば彼等に庇護されるべき市民だった。
　ただスペースノイドであるという事だけで疑惑を向けられ、ただコロニー生まれであるが故に無用な摘発や冤罪に晒される。そうして作り出された秩序は、かつての戦争で崩れかけていた地球と宇宙の国交を徐々に凍結させていった。
　やがてその行為は連邦軍上層部も見過ごしかねるものへと肥大化し、やがて００８５年に起きた３０バンチ事件によって地球圏の緊張状態は一気に炎上。後に『グリプス戦役』と称される内乱へと発展していった。

　当時ティターンズに志願し、誇りと念願の黒いスーツに袖を通したばかりのリョウト達であったが、基本的に反連邦勢力ばかりを相手にしてきたこともあり、また情報管制が行き届いていた事が災いして重要な事実など一切知らされることは無かった。

　全てが暗転したのは、宇宙世紀００８７年の１１月１６日。当時ティターンズに抵抗を続けていた反地球連邦組織『Ａｎｔｉ（エウー） Ｅａｒｔｈ Ｕｎｉｏｎ Ｇｒｏｕｐ（ゴ）』に協力していた『赤い彗星』ことシャア・アズナブルによって、これまで上層部が隠蔽していた悪行の数々が全世界に発信された。これには同じティターンズであったリョウト達も憤りを隠せず、結果としてティターンズはその求心力を急速に失っていった。その後は坂を転げ落ちる様に世間からの風聞は悪くなり、多くの仲間はそれに耐えられずエウーゴや正規軍に投降していった。
　そんな中でも、彼は最後までティターンズに残っていた。しかし、翌年２月にエウーゴによって引き起こされた『メールシュトローム作

戦』で所属する部隊は壊滅。リョウトは生き残った数少ない同胞と共にエゥーゴに捕らわれた。
その後は突如として勃発したネオ・ジオンとの戦闘のどさくさもあり、また彼が上層部の人間でない事もあって、結果的には仲間共々軽い罪で済んだ。その後は連邦軍として生きる事を余儀なくされ、こんな辺境の基地へと配属されたのであった……

だが、彼を待っていたのは正規軍や元エゥーゴ出身者達からの腫れ物に触る様な扱いであった。

ティターンズであったから、それだけの理由で基地内では話す相手などおらず、また元カラバの一員であった基地司令官やティターンズに極端な敵意を燻らせる一部の連中のおかげで不条理としか言えない環境へと身を置くことになってしまった。
こうした連中は、まるで鬼の首を取ったように自分に対して高圧的に振舞ってくる。しかも、基地内の結束を高めるため……などという胡乱な名目で、他人との必要以上の交流は制限されている。
完全にあてつけだったが、それに口答えする権利は許されない。そのせいか、本来なら関係ない他の職員やパイロット達の大半も腫れ物に触る様な態度で接することしか出来なかった。
一度はパイロット同士の乱闘で、自分を袋叩きにした相手を4人、病院送りになるまで蹂躙してやった。だが、それについては基地司令から一方的に責任を押し付けられ、准尉への降格を言い渡された。両成敗どころか、こちらが一方的に暴力事件を起こした事にされたのだった。
実際はセクハラ紛いの嫌がらせを受けていた女性職員を庇っただけで、しかも絡んできたのは4人。本来なら被害届を出しても文句は言われないところだが、常日頃から自分を目の敵にする連中に何を言っても無駄だと思い知らされた。
ただ、あの日以来直接的な嫌がらせが無くなったのがせめてもの救

いであった。陰口なんてこちらが無視していればそれで大抵はおしまいだ。

とりあえず、ほとぼりが冷めた頃にまた着替えに戻ればいい。1人である事は、何気に心地いいモノである。

＊

「……またこんな所にいたのね」

リョウトの背後からそんな声がしたのは、そろそろ戻ろうかと立ち上がった時だった。

「もう皆部屋に戻っちゃいましたよ。准尉は戻らなくていいんですか？」

続いて、どこかあどけない女性の声がする。

リョウトには、振り返らずとも誰なのかわかった。

「マヤ、あまり俺の近くにいるなと言っただろう。アリーゼも……2人揃って本当に分からず屋だな」

彼の後ろに立っていたのは、連邦軍の上着を纏った2人の女性であった。

ただし一般的なパンツルックではなく、下は2人とも学生が履くような膝丈の青いプリーツスカートという奇妙な出で立ち。その背格好を見れば、2人とも21歳のリョウトより明らかに年下である。

最初に声を掛けたのは、赤みがかったセミロングの髪とやや吊り気味の目つきが特徴の、如何にも気の強そうな少女。今この瞬間も、どこかぶすっとした面持ちでリョウトを見ている。

もう1人は、吊り目の少女の一歩後ろで2人の様子を困ったような表情で眺めている。栗色のふわっとした髪が特徴の、おっとりした印象の少女だ。

「全く……ホントに損な兄さんね」

＊

同時刻、北米大陸キャリフォルニアベース

「リョウト・アルギス准尉。元ティターンズ第６師団所属、現在は北米方面軍エルスワーズ基地のＭＳパイロットとして駐留……」

離陸を待つミディア級の輸送機の中で、女性はとある士官のデータを検分していた。

「戦績は……なるほど、悪くないな。袋叩きで機体が損壊していたにも関わらず、１人で”マラサイ”を含めて６機も撃破するなんて中々出来る事ではないよ」

彼の最新の戦績を見たその将校は、まるで掘り出し物を見つけたようにクスッと微笑を浮かべていた。

「最も、司令部に提出された報告書には僚機の”ジムⅡ”５機がそれぞれ連携して撃破。准尉は参加せず待機……とありましたね……でも、見た所、大破した機体の爆破痕は殆どがロケット弾によるものと一致しますね。斬撃部分の融解も、”ジムⅡ”のサーベル痕とは異なります」

「分隊長共が手柄を横取りしたんだろ？まぁよくある話じゃねぇか。しかも証拠改竄できてねーし」

彼女の前にいたのは、車椅子に腰掛けた眼鏡の女性士官。そして、長身痩躯な男性士官の２人。いずれも彼女の部下達であった。

「『部下の手柄は上司の手柄、上司のミスは部下のミス』……どうせ今に始まった事じゃない、あんな寂れた田舎基地じゃ日常茶飯事だろうね」

黒豹を連想させる切れ長の瞳を細めて、いつしか女性士官はクスリと笑みすら浮かべていた。

「だが……そういう所にこそ、逸材はあるものさ」

手持ちのタブレットの画面をスライドさせると、今度は何やら兵器を描いたデータ像がディスプレイに出現する。さながら戦闘機を思わせるしなやかなそれを見つめながら、女性将校はまたクスリと笑った。

＊

灰色を基調とした連邦軍の軍服に着替えたリョウト。彼が廊下に出ると、先程から自分を待っていたと思われる２人の少女が出迎える。

「今日はどうだったんですか？」

一歩後ろにいるふわっとした髪型の少女は、開口一番にそう切り出した。

「もう報告は行ってる筈だ。敵ＭＳは６機全て撃墜、こちらの被害は隊長機の中破、俺の”ヌーベル・ジムⅡ”が小破。死者ゼロ……それ以外に何か？」

リョウトは表情１つ変えず、ただ冷静に答える。

「いや違うでしょ。偶発的になったといっても、結局兄さんがほとんど押し付けられて倒したんじゃない……私も目の前で見てたんだから」

それに物申す様に、今度は左隣を歩いていたセミロングの少女が口を挟む。何処か尖った口調ではあるが、彼女はこれで結構自分を慮っているらしい。

「……整備班長さん、怒ってましたよ。あんな出鱈目な報告書出しやがってって……他の人達にですけど」

基地にいる人間の中で、ティターンズの出身者はリョウト唯１人だ。しかし……上官連中からの圧力があるとはいえ、全ての人間が敵というわけではなかった。

この２人や一部の技術者、整備係など、ほんの一握りではあったが彼を迎えてくれる人間は少なからず存在していた。

基地のパイロットの１人で、彼の義理の妹でもあるマヤ・アレイアード軍曹。１６歳という若輩にもかかわらず、パイロットとしての訓練課程を早期に卒業した学徒兵で、正規軍に属しながらもティター

ンズであったリョウトをずっと支え続けてきた人物だ。
　このエルスワーズ基地に義兄が配属されてからも、勘当同然であるリョウトを度々気にかけてくれている。
　ややツッケンドンで気の強い性格だったが、彼の知る限りこの基地の一般のパイロット連中よりは熟達した操縦技量を持っている。

　同じくエルスワーズ基地職員で、オペレーターとして修業中のアリーゼ・フィレル軍曹。年は１８歳と、マヤと程近い年齢の女の子である。
　そのおっとりした風貌と均整の取れたスタイルも相俟って、一時は幾人もの男性職員の注目の的となっていた……が、ある時、基地のパイロット達に絡まれていたところを通りすがりのリョウトに助けられた。それ以来、彼を嫌悪しない数少ない人間となっている。

　本来なら２人とも自分に関わらせたくなかったのだが、いくら言っても、脅しをかける様な口調で諭しても、一向に聞き入れようとしない。
　結局無駄な事と分ったため、いつしかこの２人が近くにいる事も自然と受け入れる様になってしまっていた。

「そういえば、ご飯まだなんでしょ？私達もこれから行こうと思ってたところだし、兄さんも来ない？」
　暫くして、マヤは不意にそう言った。
「あ、いいですね。久し振りに３人でお食事しましょうよ」
　アリーゼも、何処となく嬉しそうに同調する。
　よく考えると、ここ最近はあまり一緒にいられなかった様だ。今日は久しぶりに一緒になれたし、食事に付き合ってもいいだろう……
　最も、かき入れ時はとうに過ぎていて、あと数十分で閉鎖になる時間帯だったが。
「そうだな……久し振りに付き合うとするか」

リョウトが頷くと、マヤもクスッと笑いながら背中をポンと叩いていた。

＊

「そういえば、いよいよ明日ですねぇ」
食堂で自分の分を持ってきたアリーゼは、ふと興奮した様に言った。
「明日って……何かあった？」
マヤはミートパイを器用に切り分けながら顔を上げる。
「キャリフォルニアベースから、ルナツーを拠点とする教導隊が出張してくる。我々全員を相手に実戦訓練や指導と言った研修活動を引き受けてくれるそうだ」
隣では、リョウトが食事をしながら丁寧な説明を始める。アリーゼやマヤがしっかりしたメニューなのに対し、リョウトの食卓にあるのは大きなリンゴが1個だけ。それを皮ごと咀嚼し、噛み砕いて飲み込む。
定刻通りの食事に間に合わないときは、彼はリンゴだけで済ませるのが日常。もう閉鎖時間ギリギリだった事もあるが、残っていたのはこれだけだった。
とはいえ、これだけなら面倒な手間もいらない。後は部屋に置いてあるサプリメントでも事足りるだろう。
「教導団『オルトロス』……ルナツーきっての精鋭を揃えたエースっていう話です。きっと凄い人達なんですね……！」
アリーゼは、明日現れるであろう珍客の事を想像し、口調も興奮気味の様だ。

『オルトロス』
それは、ルナツーを拠点とする連邦宇宙軍が結成した、新進気鋭の

教導隊の名前であった。本来はギリシャ神話に登場する双頭の魔犬の呼称だが、キャリフォルニアベースに降り立ってから数ヶ月、各地の連邦軍に対して実戦さながらの熾烈な演習、教導を行っているとの噂の部隊だ。
その名の通り、背中合わせになった恐ろしげな2頭の犬を模ったエンブレムが特徴で、同じ宇宙軍の教導隊である『ネメシス』と並んで有名な存在である。

「噂では、かなり腕の立つ猛者揃いということだ。恐らくその気になれば、此処の連中など造作もなく潰されるだろう……ま、お手柔らかにしてくれればいいがな」
実のところ、懸念材料はその辺りだ。
教導隊の活動は、基本的に『仮想敵(アグレッサー)』として実戦形式での指導を行うのが通例。しかし、その多くは実戦さながらの過酷なスタイルで行われる。
当然、並みの模擬戦とは比べ物にならない運動力、判断が必要となるのだ。その過酷さについてこれず、なし崩しでパイロットを引退する人間も少なくない。

「そうかしら……兄さんなら心配ないと思うわ」
そんなリョウトを遮るように、マヤが呟く。
「ほぇ?どうしてそう思うんですか??」
アリーゼが興味津々に聞き返す。
「当たり前じゃない。私の知ってるパイロットじゃ、兄さんが一番強いんだから!……ってヴェッ!」
自慢する様にそう返すマヤ。しかし……
ドヤ顔で言ってしまったものの、正面にアリーゼのにこにこした顔があるのに気付いて素っ頓狂な声を上げてしまう。
「マヤちゃん、准尉のこと信じてるんですね……いいなぁ」
当の本人は、兄を強く信頼している妹の姿を微笑ましげに見守っているだけだった。

「ちっ、違うの！違うのよッ！アリーゼってば、何変な想像してんのよ～～～～～～!!!」
一方、マヤの方は何故だか顔を真っ赤にして慌てふためいている。
結局、食堂が閉まるまで3人のほのぼのしたやり取りは続いたのだった。

＊

「なぁ、明日の教導隊連中との模擬戦、どうなると思う？」
男子兵舎の談話室では、数人のパイロットがカードゲームをしながら明日の事についてあれこれ話し合っていた。
「そりゃ当然、泣く子も黙るオルトロス隊の奴等だぜ。一般パイロットにゃ勝てやしないって」
それは、当然と言えば当然の意見だ。

今、連邦はネオ・ジオンの攻勢を受け、戦闘状態に突入している。だが、軍本部はさきの大戦で、本拠地であるジャブローを失っていた。
そのため指揮系統が追い付かず、現在はまともな連携も取れずに個々が戦っているという脆い状況なのだ。
特に宇宙は戦火が激しく、一年戦争時は外様扱いされていた宇宙軍が必死に食い止めているのが現状である。逆に言うと、宇宙軍はそれだけの修羅場の渦中にいる事になる。
そんな戦場を常に渡り歩いている様な連中、お世辞にものどかな辺境基地のパイロットで食い止められるわけがない。
ましてや、そんな連中を教練して育て上げるためのエキスパート揃い、それが教導隊である。
ただ、ネオ・ジオンとの戦争に陥る直前に宇宙軍の教導隊である『ニューディサイズ』が大規模な反乱を起こしたこともあり、良くも悪

くも……という意味で教導隊そのものは畏怖されていた。

「まぁいいんじゃね？いくらネオ・ジオンと戦ってるっつってもお偉いさんは消極的なんだし、俺等にお鉢が回るって事ぁ無いって」

「だな。どうせ適当に訓練して、帰っちまったらまた元通りさ」

とはいえ……こんな辺境基地にスクランブルなどそうそうかかるわけでもない。精々、今日みたいなジオン残党の駆逐がいいところだが、それも大して多いものではない。

言うなれば、この北米はかなり退屈な場所でもあるのだ。寧ろ、給料泥棒と陰口を叩かれている始末。

「あ～あ、早く終わってくれねぇかなぁ……」

誰かがポツリと漏らした愚痴が、夜の闇へと消えていく……明らかにだらけきったその声色に、反応する者は誰もいなかった。

＊

5月5日、早朝

エルスワーズ基地より数十キロの地点にある古びた滑走路に、大型のミディア級輸送艇が着陸する。随伴するガンペリー2機も、その両側に降り立っていた。

その中から、幾人もの連邦軍士官がゾロゾロと地上に現れて迅速に自分の持ち場へと移っていく。

彼等の服はデザインは通常の軍服と変わらない。しかし、本来黒とベージュのツートーンカラーである筈の軍服の色が、灰色と青銅色に変更されている点で通常と異なっている（リョウトが未だに赤、黒を基調としたティターンズの制服を纏っているのと似たような感じである）。

その中で数人、雰囲気の異なる人間も見受けられた。

「さてと……あんたが狙ってる原石ちゃんは、どんな野郎かねぇ」

ウェーブのかかった濃いブルネットの長髪を靡かせた長身の青年が、手に握った胡桃をカラカラと鳴らしながら呟く。
「それは、自分の目で見て確かめるさ。自分の中では確定だが、一応は大尉や皆にも品定めして貰うよ」
先頭を行くのは、怜悧な雰囲気を湛えた黒髪の女性士官。口元に薄紫のルージュを塗っているせいか、何処となく妖艶さすら覚えてしまう。
「大丈夫だよ〜〜、だってニコが見つけたんだもん。絶対、大尉の眼鏡にだって適うと思いますよ♪」
そんな青年と女性に声を掛けるのは、彼等より頭2つ分小さい童顔の女性。ルビーのような赤い双眸と可愛らしく纏められた黒いツインテールが特徴の、少女と言っても遜色ない隊員であった。
「いずれにせよ、まずはカリキュラムを始めてから……ですわね」
その少女を制すように、彼女の後ろにいた眼鏡の女性士官が呟いた。彼女はこの中では1人だけ車椅子で移動していたが、仲間達と同じく軽快な仕草で彼等と共に歩を進めていく。
「そうだ。とりあえずは始めようではないか」
先頭を行く黒髪の女性士官は、一同を振り返りながら眼前の大地へと足を踏み出していった。

＊

エルスワーズ基地は、規模としては中の上に当たる北米有数の拠点である。
そのため、講堂に収容できる人数も、また所有するパイロットの数も決して少なくは無い。
本来なら地上にいるジオン残党の対抗措置として、本部からも戦力増強が求められるものだが……しかし、一年戦争時、この基地でジャブロー攻略失敗を契機として多数の軍高官を招いた式典が開かれて

いる最中に、ジオンの襲撃を受けて多くの犠牲者を出した。所謂曰くつきの場所でもあった。
地下に会った鍾乳洞を伝って基地内部に潜入されてしまったが、その場に居合わせた教導隊が指揮を執って鎮圧させた……というのが顛末であるが、これによって今も尚よくない印象の基地と認識されていた。
それに加えて、北米のジオン残党は既にその多くが鎮圧されたり、またゲリラ活動から足を洗った者達も多く、激戦地とは程遠い場所となっているのも現状であった。

今、そこから1隻の〝ビッグトレー級移動戦艦〟が朝日を浴びて出撃していった。

今回、オルトロス隊から通達されたのは、基地の北東４５キロ地点に位置する訓練地帯への集合。鍾乳洞が点在するこの地域は天然の遮蔽物に富み、またそこかしこに大戦時の機体の残骸が放置されていることから軍事演習に度々用いられていた。

やがて、目的地周辺までやって来たビッグトレーは徐々に減速して停止に移行する。上空から1機のガンペリーが降りてきたのは、ちょうどその時だった。

（確かに莫迦らしい……）
最後尾に整列したリョウトは、明らかに緊張感のない同輩達を見つめながら首をコキコキと鳴らした。
（朽木不可雕也。糞土之牆（腐った木に彫刻は彫れないし、ボロボロの壁は治しようがない）……全く、よく言ったものだ。が……）
昔読んだ古代中国の書『論語』の一説を思い起こしながら、彼の目線は眼前に集結した者達へと向けられていた。彼等の雰囲気は、明ら

かに基地職員のそれとは違っていた。
眼前にいるのは2人の人影。今しがた接触したガンペリーからこちらに降りてきた、オルトロス隊の構成員だった。
1人は車椅子に腰掛けた長身の女性で、肩にかけたショールも相俟って何処となく穏やかそうな雰囲気を醸し出している。
もう1人は、一際小柄な体格をした少女らしき人物だ。くりっとした赤い双眸とセミロングの黒いツインテールが可愛らしさを強調している様で、一見するとジュニアハイスクールの生徒がコスプレをしている様にすら思えてしまう。

だが、全身から染み出てくる微かな威圧感をリョウトは確実に感じ取っていた。
（こいつら、一体何を始める気だ……？）
少なくとも、普通に訓練をやって終わり……というような感じではない。きっと何か、予想もつかないアクションを起こしてもおかしくない……
確証は無い。しかし、ティターンズの時分から培ってきた感性が微かに放つ警告。それを無視できずにいる事も事実だった。
とにかく、万一のため機体はいつでも出られるようにした方がいい。
そう結論付けると、リョウトはさりげなく後方の”ヌーベル・ジムⅡ”を見上げた。

＊

『初めましてーーーーー、ルナツーからはるばる出張してきました、オルトロス隊でぇ～～～～っす♪』
壇上に立つ小柄な女性は、まるでアイドルが自己紹介でもするように高らかに言い放つ。
『てへっ♪』
連邦軍の軍服を着ているが、知らない人物が見れば完全に芸能活動

だ。現に、集まったパイロットや後方要員の中には、ヒューヒューと口笛や歓声で返す者も多い。
「……なんっっっかムカつく笑顔ね」
そんな光景を見てイライラしているのは、最前列に立つマヤ。何故だか眼輪筋をヒクヒクさせ、その端正な顔に青筋が走っている様にさえみえる。
「そ、そんなこと言っちゃダメですよ。きっとまた物凄い訓練をするかもしれないです……」
真後ろに並ぶアリーゼが、思わず窘めた。
「あのねぇ……コレのどこをどう見たら、ルナツーきっての教導隊に見えんのよ？完ッ全に学芸会気取りじゃない……ホントに意味わかんないわ」
「わぁ～～～凄～～い、今日は元気いっぱいな子がいて、ニコも嬉し～～～い」
だが……その時、壇上にいる女性が不意にマヤの報に振り向いた。どうやら、今言ったことはしっかり聞こえてしまっていたらしい。
「――――――なんてね。随分威勢のいい事言うじゃない、ガキが」
瞬間、その口調は先刻とはうって変わって底冷えする様な冷たいものへと変貌していた。同時に、周囲からの雑音もピタリと止んでしまう。
気が付けば、水を打った様な静けさとゾッとさせられるような威圧感が講堂を支配していた。

「そこのアンタ……随分ナメきってるみたいだけど、あまり人を見かけで判断しちゃダメよ。でないと……ここぞって時に痛い目見る事になるわ」
先程まで幼い少女の様に輝いていた双眸は、何時の間にか獲物を狙う猛獣の様にぎらついた輝きへと変わっている。その視線は、最前列にいたマヤとアリーゼに殺気と共に向けられていた。

「あっ、そう……」
しかし、マヤも負けてはいない。
一瞬のうちにその表情から侮蔑や落胆は消えうせ、殺気交じりの鋭い視線を壇上へと向けていた。
「ならそっちこそ、今のセリフそっくりそのまま返して差し上げますよ。お客さんだからって調子に乗ってると……本ッ気で泣かすわよ」
互いに譲らない視線で双方を睨みつける2人。
「こら、何バカな事してるんですか、ニコ」ぺちっ「あぅ」
一触即発……と思いきや、その均衡はいとも簡単に締め括られてしまっていた。
車椅子の女性が、何時の間にか小柄な女性を背後からタブレットで引っぱたいていたのだ。
「って、ナスターシャ中尉、痛いですよ～～～～!!」
「自業自得です。勝手に話の腰を折るからですよ……そこの貴女もです」
一見穏やかな眼鏡女子の様だが、その柔和な表情の奥に何かを感じ取ったらしい。マヤも思わず強張った表情で後ずさりしていた。

「さて、ちょっと脱線してしまいましたが……申し遅れました。私は戦術士官のナスターシャ・マカロフ中尉です。そしてこちらが、モビルスーツパイロットの――――」
「ニコ・Ｊ（ジュナス）＝エストレア准尉。これでも２０歳よ」
先程より憮然とした表情で、女性―ニコ・Ｊ＝エストレア―は眼前

の緊張感のない職員を見渡す。
「さて……もうご存知かと思いますが、我々オルトロス隊はこれから72時間の間、この基地での滞在、共同演習を行える許可を得ております」
車椅子の士官―ナスターシャ・マカロフ―も、やや真剣みを帯びた表情で説明を始める。
「ですが……こちらもせっかく宇宙から地上に下りられたのです。ですので感謝の意も込めて、一日目は少々趣向を凝らした形で演習を行う事にしました」

「――――というわけで、この拠点（ビッグトレー）は一先ず乗っ取らせていただきますね」

Ｐｈａｓｅ—０１　Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｐａｒｔ

「――――というわけで、この拠点（ビッグトレー）は一先ず乗っ取らせていただきますね」

突然シレッと放たれた思いがけない言葉。余りの突拍子もない発言に、その場にいた人間の殆どが唖然としていた。

だが、すぐにその言葉の意味を理解した。但し、それを知らせてくれたのは次の言葉……などではなく、

『ミノフスキー粒子の反応増大！各員、警戒体制に移行！繰り返す、警戒体制に移行せよ!!』

突如として鳴り響いた地響きとけたたましい警報の音色だった。

「あれぇ、今言ったの聞こえなかったぁ？あたし達でこの艦乗っ取るって、中尉は確かに言ったわよ。平和ボケしたあんた達がどれだけできるのか、まずはお手並み拝見させて貰うわ」

そう言いながら一同を見下ろすニコは、まるで小悪魔の様にペロッと舌を覗かせて含み笑いを漏らしていた。

「あぁそれと、悪いけど今回は実弾装備で襲わせて貰ってるの。あんまり気ぃ抜いてると……」

……アンタ達、マジで死ぬわよ」

＊

同時刻、

「班長！」

いち早く”ヌーベル・ジムⅡ”の傍に駆け付けたリョウトは、愛機の整備作業を行っていた整備班長を呼び止める。

「ティターンズの兄ちゃん、いきなりどうしたんだぁ??」

先刻の警報で周囲が困惑している中、突然やってきた彼。このタイミングで来るなんて一体どういう了見だ??
と班長が思っていると、リョウトはやや強引に灰色の”ヌーベル・ジムⅡ”に歩いていく。
「この機体、整備は終わっているか?」
「あ、あぁ。アクチュエータも肩のアーマーも新しいのに取り替えた。何時でも出撃られるさ」
その言葉を聞くや否や、タラップを伝って開放されたコックピットハッチに取りつく。一瞬の後、リョウトの身体は操縦席にすっぽりと収まっていた。
「ありがとう……そうだ、得物の方は何かあるか?」
実は先日の戦闘で、本来の装備であるハイパーバズーカは破壊されていた。流石に武器がビームサーベルや頭部のバルカンだけというのは心許ない。
「そうだな……いいモノ用意できてるぜ」
そんな時だった。
班長がやけに嬉しそうな顔で”ヌーベル・ジムⅡ”を見上げたのは。そして、徐に自分の後ろを指で指した。
「……?」
見ると、後ろの格納スペースに何か細長いものがデンと置かれている。
「これは……昨日回収した武器じゃないか」
「武器の支給なんざ申請しても、お前さんじゃ見送られると思ってな……とりあえず”ヌーベル・ジムⅡ”用に調整はしといたぜ」
そこに安置されていたのは、昨日”マラサイ”を撃破した時に回収したフェダーインライフルだった。通常のビームライフルより強力で、そのうえビームサーベル用のデバイスまで内蔵した複合武器。かつてはティターンズでも採用されていた得物だったので、リョウトにもその有用性は理解できていた。
「そうか――――――ありがとう、なら今から存分に使わせて貰う。班長達は持ち場に着いていてほしい……恐らく、今から俺達も演習に

入る筈だ」
　そのまま手際よく起動ウィンドウを開き、全天周モニターを立ち上げる。これでいつでも出撃は可能だ。
　瞬間――――――外から、耳を劈く様な轟音が響いてきた。

＊

「うわっ……何なのよ、一体!?」
　整列していた人間の中で、いち早く動いたのはマヤとアリーゼだった。
「わ、わかりません！でも、乗っ取るって言ってたって事は……」
「そーよ」
　慌てふためくアリーゼに相槌を打ったのは、先程まで壇上にいたツインテールの女性だった。いつの間にか2人の傍まで降りてきている。
「いつまでボサッと突っ立ってんの、もう戦いは始まってんのよ。ホラ、さっさと何か手を打たないと……ホントに艦ごと粉微塵になっちゃうか・も・ね」
　悪戯っぽく舌を出しながら、さらりと恐ろしい事を言ってのける。
「こ、このぉ……バカにしてんじゃないわよ！アリーゼ、早くブリッジに行って!!ほら、あんた達もボサッとしない！モビルスーツパイロットは早く出撃するから急ぎなさい!!!!」
「りょ、りょーかいしましたです!!」
　だが、マヤも黙ってはいない。大声で跳ね除けると、周りに聞こえる様に怒鳴りつけていた。それを聞き取ったのか、何人かの男達が粟を食った様に各々の機体へと駆け出していく。
　マヤとアリーゼは未だに薄ら笑いを浮かべるニコを一瞥すると、自分達も持ち場に着くために駆け足でその場から離れていった。

＊

同時刻、

「もう撃ってきたか……やってくれるな」

フェダーインライフルを構えた”ヌーベル・ジムⅡ”が、今まさに拘束具から解き放たれていた。そのまま歩き出し、側面の搬入ハッチの傍でゆっくりとしゃがみ込む。

（音響センサーに変更。これで熱源と並行して振動を感知することが出来る……）

先程の爆音は、恐らくバズーカによる砲撃音だろう。遠距離武装を持っているとなれば、下手に姿を晒すのは危険だ。

幸い、初弾はビッグトレーを外れて着弾した様だが、のこのこ顔を出した瞬間に狙い撃ちにされてはたまらない。

ならば、今艦の中にいるこの状況を逆手に取ればいい。

このフェダーインライフルならば、バズーカより射程距離は長い。ＯＳを最適化させたばかりで未だ扱い辛い所はあるが、”ガブスレイ”に乗っていた頃から扱い方は心得ている。

一瞬でも気を逸らす事が出来れば、攻撃に転ずる時間は稼げるだろう。

「……来たか」

そうしているうちに、センサーが接近してくる何かを捕らえた。

「こいつは……”ネモ”か」

表示された機体は、ジム系統によく似た風貌のＭＳである。リョウトには、それがかつてグリプス戦役で活躍した機体、ＭＳＡ―００３”ネモ”だと一瞬で理解できた。たった１機だが、そいつは真っ直ぐにこのビッグトレーを目指している。そして同時に、今”ヌーベル・ジムⅡ”が身を潜める搬入口の方から近づきつつあった。

恐らく、こちらに気付いている可能性も否めない。だが、こちらに来てくれるのならば……

（いい度胸だ……返り討ちにしてくれるッ!!）
全天周モニターの視界に動く機影を捉えた瞬間、構えているフェダーインライフルの砲口が火を噴いていた。

ビームが閃いた瞬間、灰色の”ネモ”は一瞬早く脚部のスラスターを噴射して自機の機動を逸らす。しかし、リョウトはそれを見てはいなかった。トリガーを引いた時には、既に背中のスラスターを起動させ、搬入ハッチから飛び出していたのだ。
この機体だけ事前に整備を頼んでいた事が、今回は功を奏した様だ。一般格納庫では、今頃大わらわで他の連中が機体に乗り込んでいる頃だろう。
自分がいち早く出てきたのも、班長が事前に機体を万全にしてくれた事も、今回は吉と出てくれたようだ。

しかし、今は先程撃ち漏らした”ネモ”を仕留めるのが先だ。モニターに捉えた相手は、”ドム”が使用する砲撃武装『ラケーテン・バズ』を持っている。なるほど、先程の砲撃はこいつの仕業だったか……
とはいえ元々がエゥーゴの機体である”ネモ”。それが目の前にあるという事は、元ティターンズの自分としては多少複雑な気もしなくはない。だが、敵意を持って迫っているという時点で些細な感傷は隅に追いやっていた。
今、何とかしなければ自分は殺される……そう思う程の気迫が眼前の機体からあふれ出ている気がしたからだ。
そう思った時、”ネモ”は徐にラケーテン・バズを投げ捨て、腰から小型のライフルを構える。
（ビームライフル!?）
瞬間、メガ粒子の鋭い閃光が”ヌーベル・ジムⅡ”を掠めて地表に着弾する。
「ビームの出力が上げられている……奴等、本気で殺すつもりかよ!」

＊

その頃、

「くっそぉ！一体何だってんだよ!?」
「わかんねぇ！けどヤバそうだったぜ」
スーツを纏うのもままならず、慌てふためきながら各々の機体に乗り込むパイロット達。ビッグトレーのハンガーに固定されていた”ジムⅡ”が次々に降ろされ、出撃していく。

しかし……
「えぇい、どけ！」
「オレが先だ！邪魔すんなッ」
「って、暴れんな！危ない！」
我先にとハッチに殺到したため、機体同士の肩がぶつかったり足が引っかかったり、果ては得物が絡まったりと、まともに外へ出る事さえままならない。完全に虚を突かれ、混乱に陥っていた。
「あぁ、もぅ!!」
そんな中でも、マヤ・アレイアードだけは平静を保っていた。
予備パイロットである彼女は、本来パーツ取りのために置かれていた予備の”ジムⅡ”に乗り込んでいた。だが、混乱する先輩パイロット達とは異なり、あまり動かずに佇んでいる。
こういう時、パニックに陥るのは一番まずい事だと理解していたからである。
「アリーゼ、聞こえる？」
『聞こえてますよ、マヤちゃん』
そしてもう1つ、彼女はオペレーティングを行っているアリーゼと回線で連絡を取り合っている最中でもあった。
「側面のハッチから出るわ。ちょっとシャッター壊すかもしれないけ

ど……」
『わかったです……裏口に敵影はありません。管制室から開けられますから、出たらすぐに状況開始しますねッ』
「……了解！」

＊

エルスワーズ基地西端の荒れ地で、２機の灰色のＭＳが乱舞する。
”ヌーベル・ジムⅡ”のフェダーインライフルが、”ネモ”目掛けて発射される。それを余裕綽々で回避した”ネモ”は、右手のビームライフルを釣瓶撃ちに放った。
胴体への直撃コース……そう気付いた時、リョウトは動きを止め、左腕のミドル・シールドを構える。同時に高熱のエネルギーが盾に直撃し、機体を後ずさりさせていた。
（なんて威力だ……シールドを3発で潰しやがった！）
今の一撃がシールドの表面を融解させ、当たった部分がボロボロに崩れている。いくら型遅れ品とはいえ、シールドを僅か数発で破壊するなど、敵のビームライフルは相当出力を上げている様だ。
とにもかくにも、これでもう盾は使えない。
フェダーインライフルのエネルギーも、チャージまであと１０秒と表示されている。この出力での乱発は砲身が焼き付きかねない。
「使えるのはサーベルとバルカンだけか……ったく、割に合わないな」
幸い、フェダーインライフルのサーベル発生機構はライフルのエネルギーと別系統。たとえライフルが焼けついたとしてもある程度の展開は出来る。それに、”ヌーベル・ジムⅡ”は背部ランドセルに格闘戦用のビームサーベルをマウントしている。
相手の力は未知数だが、場を持たせるにはこれを使うしかない。
すぐさまフェダーインライフルを持ち替えてサーベルを形成する。
すると、前方の〝ネモ〟も、ビームライフルを不意に仕舞った。そして、腰からサーベルを引き抜いて身構える。
どうやら向こうも格闘戦をご所望らしい。

しかし、そのスタイルが更に苛立ちを募らせていく……
「この……舐めるなよ!!!!」

＊

同時刻、
ぎゅうぎゅう詰めになった正面ハッチから、1機の”ジムⅡ”が這い出る様に姿を現す。
「よ、よし!出て来れたッ、これで態勢を……」
ようやく出て来れた事に安堵し、肩の力を抜くパイロット。しかし、次の瞬間――――

ドガッ!!
機体に強い振動が走る。
「なっ……」
慌ててモニターを見た瞬間、パイロットは凍り付いた。自機の正面に、灰色の機影が接近していたからだ。
其　処に立っていたのは、”ジムⅡ”をよりマッシブにした感じの風貌を持つ灰色のＭＳ……ＲＧＭ―８６Ｒ”ジムⅢ”であった。灰色と濃紺を基調とした色合いに、右肩だけが鮮やかな青銅色に塗られている。その手にはジオン系ＭＳに多用されていた短剣状のヒートサーベルが握られている。
『悪いな、ちょっと寝てろ』
接触回線だろうか、そんな声が聞こえたと思うと、”ジムⅡ”にヒートサーベルの一撃が叩き込まれていた。
「ぶげっっ!!」
側頭部に強烈な一撃を受け、”ジムⅡ”は成す術も無く跳ね飛ばされていた。

＊

「それで、状況はどうなっていますか？」

格納庫の床に座ったニコは、降りてきたナスターシャに徐に問い掛けた。

「ハードナー大尉、ファルージャ中尉、ともに作戦行動に入りました。現在は各個遊撃に入っています」

まるで天気の話をするかのように、彼女はにこやかに返事を返す。

「あのザルな連中がどこまで耐えられるか……でも、これでニコが見つけたあいつの事も、隊長達が気に入ってくれるといいんですけどねッ」

今まで嘲笑を浮かべていたニコも、先程と同じ無邪気な笑顔でナスターシャに振り向く。

「あら……そのお気に入りの彼、隊長と戦ってるみたいですよ」

「ホントですか!?!?」

途端に、ニコは飛び付いたように跳ね上がり、目を輝かせてこちらに向き直った。

「しかも1対1……これは中々、見物（みもの）かもしれませんね」

「……よっと」

暫くタブレットを眺めていたニコは、不意にすっくと立ち上がった。その場でスカートをパタパタと叩く。

「……じゃ、そろそろニコも行きますか♪あの赤毛のちんちくりんにも挨拶くらいはしないとねッ」

＊

”ネモ”の振り下ろすビームサーベル。”ヌーベル・ジムⅡ”はすかさずフェダーインライフルでそれを弾く。だが同時に、もう片方の手に握られたサーベルが”ヌーベル・ジムⅡ”の左側面から襲ってきた。

「やらせるか!!」

咄嗟にリョウトも背中から抜いていたサーベルを展開させると、迫ってきた光刃を押し戻して逆に弾き飛ばした。
素早く〝ネモ〟は距離を取り、再び腰のライフルを構える。しかし、それを逃がすまいと〝ヌーベル・ジムⅡ〟が既にブーストを噴かして肉薄していた。
すかさずフェダーインライフルを横凪ぎに振るう。
ビームライフルの先端がフェダーインライフルの光刃で焼切られ、真っ二つにへし折れるのが見えた。
（これで飛び道具は潰した……今度こそ仕留める!!!）
先程の格闘戦はかなり際どかったが、チャージまでの１０秒はしっかり稼ぐことが出来た。そのうえ、相手のビームライフルも破壊できている。このタイミングならば、相手が態勢を整える前に捕らえることが出来る筈だ。
散々暴れてくれたが、王手（チェックメイト）はしっかり奪わせて貰った……!!
『なるほど、ここまでやるなんてな……納得だ、悪くないぜ』
瞬間、回線からそんな声がした。
「？」
どうやら、眼前の〝ネモ〟からの通信らしい。この期に及んで何を言いだすのか……??
途端に、リョウトの双眸が驚愕の色と共に大きく見開かれていた。
バシュ！バシュ！バシュ！
不意に乾いた音がしたと思うと、灰色の〝ヌーベル・ジムⅡ〟が不意に脱力して前のめりに転倒してしまっていたのだ。
「何!?」
咄嗟にダメージコントロールをチェックすると、四肢の関節部にダメージを受けたとの表示が記され、右膝が撃ち抜かれた様に破損していた。
「バカなッ！ビームライフルは潰した筈――――――」

リョウトにとって、それはあまりに信じられない事だった。
サーベルは相手の手元にない。そのうえビームライフルも破壊している。相手の射撃武器はもう頭部の迎撃バルカンくらいしか残っていない筈だ。
なのに、今受けたのは明らかに『撃たれた』感触だった！
しかし、全天周モニターに表示された〝ネモ〟を見た瞬間、その疑問は氷解した。

〝ネモ〟はいつの間に構えていたのか、両手に小型の拳銃を2丁携えていた。よく見れば、大腿部には追加装甲の様なパーツが据え付けられている。もしかして、この装甲は銃のホルスターなのか……？
『どうだい？思いっきり戦り合った感想は』
気が付くと、あおむけに倒れた〝ヌーベル・ジムⅡ〟を〝ネモ〟が引っ張り起こして立ち上がらせる。その立ち居振る舞いに、もう敵意は感じられなかった。
「あんた、一体何のつもり……」
『こういうやり方なんだよ。死人や重傷患者さえ出さなきゃ何しても良いってお達しだったんでな、ちょいと脅かしてやったのさ……だが、とりあえずこんなところだ。試験終了だよ』

どうやら、自分達はまんまと乗せられたらしい。
そう悟った時には、既に教導隊のホバートラックがこちらに向かって来るところだった。

＊

『ハッハー！どいつもこいつもこの程度か、俺1人倒せないでよくやってられんなァ』
ヒートサーベルを振りかざす〝ジムⅢ〟の足元には、行動不能に

なった5機の”ジムⅡ”が転がったり動けなくなってたりしていた。
パイロット達は突然の教導隊の動きについて行けず、逆にたった1機に手玉に取られるという醜態。連携もへったくれも無く、次々に行動不能にされていく。
こんなのが表に知れたら、減俸どころじゃ済まされない。
『……ったく、こっちはハズレか。ロクな対応も出来ない平和ボケ共め、連邦軍がこんな体たらくなんて、信じられんものだなぁ』
”ジムⅢ”のパイロットは、何処となく気怠そうに漏らす。オープン回線でべらべら喋ってしまってる所を見ると、敢えて聞かせている様だ。
「調子に乗ってんじゃ、ないわよ!!!」
途端に、”ジムⅢ”は素早くシールドを翳して身構える。一瞬の後、その表面に幾つもの弾痕が刻まれた。
「さっきから聞いてたら言いたい放題じゃない、あんた達いい加減にしときなさいよね!!」
倉庫の影から現れたのは、ジム・ライフルを構えた”ジムⅡ”が1機。カラーリングは他のと変わらないが、ぴったりと構えた銃口が狙いを定めている。
『ほほぅ、意外と出来るのがいるじゃないか』
一方、”ジムⅢ”は興味を示したのか、ヒートサーベルの切っ先を”ジムⅡ”に向けて対峙する。
『そんなライフル1丁で俺と勝負する気か?やめとけ。相手にもならんよ』
「そうかしら?」
間髪入れず、”ジムⅡ”がライフルを撃つ。”ジムⅢ”は造作もないと言わんばかりにシールドで弾き飛ばした。
だが、同時に”ジムⅢ”に向けて何かが噴煙を上げながら飛来する。
(シュツルムファウスト!?)
”ジムⅡ”は、盾の内側に単発式のロケット弾「シュツルムファウスト」を仕込んでいた。それをジム・ライフルと同時に撃ったのだ。

『ヒュゥ♪やるな…だが！』
直撃すればシールドでも吹っ飛ばせる威力のロケット弾。しかし”ジムⅢ”は狼狽えず、頭部のバルカンで迎撃する。飛来した弾頭は、瞬く間に蜂の巣となって爆散した。
”ジムⅢ”のパイロットは狼狽えるどころか、寧ろ感嘆した様に唸っている。
しかし、
「後ろがガラ空きよ!!」
発生した爆炎を突っ切って、”ジムⅡ”が側面へと躍り出ていた。その手にはビームサーベルが握られている。

『マヤちゃん、今です！』
「わかってるわ、これで……!!」
”ジムⅡ”のコックピットの中で、マヤは勝機を確信していた。”ジムⅢ”はシュツルムファウストの爆炎に飲み込まれ、こちらの位置が把握できていない。その隙をついて背後に滑り込み、一気に畳み掛ける。
危険な賭けではあったが、1度優位を取ればこちらのものだ。後は気絶なり何なりしてリタイアして貰うだけ。

『ふふ～～ん、着眼点は立派ね。でも、注意力散漫だわ』
『しかも、俺ばかりに気ぃ取られて、周りが全然見えてない……いい感じだが、まだ青いなぁ』
瞬間――――”ジムⅡ”は、何の前触れも無く後方に吹っ飛ばされる。
「え……!?」
そして同時に、彼方から飛来した何かが直撃し、ボンッ……！という着弾音と共に機体の胴体と頭がピンクの斑模様に染め上げられていた。
「痛ぅ……な、何？」

マヤには一瞬、何が起きたか解らなかった。理解できたのは、機体ごと自分が吹っ飛ばされたことくらいである。
咄嗟に全天周モニターを見ると、頭部と胴体にそれぞれ直撃弾を喰らって撃破された……という意味の表示が無情に閃いていた。
『流石にあたし達に啖呵切るくらいのことはあるわね。他の奴よりは幾分かマシだわ』
何時の間にか、前方にはもう1機のＭＳが佇んでいた。”ジムⅢ”以上にがっしりした重厚な体躯、背中に装備された2門のキャノン砲。一年戦争時の名機”ガンキャノン”を連想させるそれを見て、マヤはそれがＲＧＣ―８３”ジムキャノンⅡ”だと気付いた。
さらに後方から、大型の狙撃用ビームライフルを装備した機体が接近してくるのが分かった。モニターには、ＲＧＭ―７９ＳＣ”ジム・スナイパーカスタム”との表示がされている。
通信を掛けてきたの”ジム・キャノンⅡ”……そして、それに乗っているのが誰なのかもマヤは朧気ながら感づいていた。
「あんた、可愛い顔して結構悪趣味ね……一本取られたのは認めるけど」
撃破判定の出た自分の機体に、目の前で佇む3機のＭＳ……今のマヤに出来るのは、回線を通じて投降のサインを出す事くらいであった。
「ＭＳ全機行動不能、これにより当基地は制圧されました。ＭｉｓｓｉｏｎＦａｉｌｄ」
暫くして、基地全域にナスターシャの透き通った声が響き渡った。

＊

「……と、いうことですよ。これでもまだ戦(や)りますか？」
ビッグトレーの管制塔の内部。其処で通信を切ったナスターシャ

は、にこやかな表情で手にしたアサルトライフルをくるくる回転させる。
その先には……
「こ…降参ですぅ……」
隊員達に四方から銃口を向けられ、今にも泣きだしそうなアリーゼと数名の要員が手を挙げて縮こまっていた。

＊

数時間後、講堂にはパイロットばかり十数人が集められていた。
その中にはリョウトやマヤの姿も、そして完膚なきまでに叩きのめされたパイロット達の姿も見える。
『あんた達のやり方、練度、抜き打ちで見せてもらったわ。それじゃ、今回相手役をしてくれたラダメス・ファルージャ中尉から一言あるからよく聞いておきなさい』
何時の間にか、壇上にはニコが仁王立ちで一同を見下ろしている。
その隣にはもう1人、大柄な軍人が立っていた。
肌の色はアジア系の様だが、立ち居振る舞いは寧ろ西暦時代のベドウィンを思わせる様にさえ見える。
そんな彼は、鷹の様な目つきで一同を見渡して……そして徐に口を開いた。
「諸君達の振舞い、練度は幾分か見せてもらった。それを踏まえた上で幾つか言いたい事はあるが……まずは結論を言わせて貰おう」
開口一番にそう言うと、今度は先程より低い声色で再び口を開いた。
「何もかもなっていない。ジュニアスクールのお遊戯会以下、ダメダメのE判定だ！」

突然、とんでもない事を言われ、眼下の者達はざわざわと動揺し始める。
「ろくな統制も取れず、必要な管制もほとんど機能せず、ＭＳの操縦に至っては歩かせる事すら満足に出来ていない！これだけ言われて恥ずかしいと思わんのか!?」

（あれだけの醜態となれば、無理もないか……）
ざわつく先輩達を尻目に、リョウトはやれやれと言わんばかりに溜息を尽いていた。
厳密には自分も負けた分、同じ穴のムジナと言ってもいいくらいだ。とはいっても、あの連中は基礎的な戦術すら組まずに勢いだけで飛び出してコテンパンにされたのだ。これでは教導隊でなくても頭を抱えたくなる。
唯一マシだったのは予備機で〝ジムⅢ〟に立ち向かったマヤ、その彼女のサポートに徹したアリーゼくらいだろうが、どちらにしろ全員『戦死』させられたのだ。連帯責任でもあるため、お咎めは免れないだろう。
これだけの激戦をやった後に説教など、想像すると本気で胸が重くなる。
「そもそもスクランブル警報を受けてもすぐに動けず、機体の点検確認や武装チェックもろくに行わず、あまつさえ敵の情報さえ知ろうともしないでノコノコ出てくる……最低限必要な動作も満足に出来んのか、Ｅクラス共め!!」
よりによってＥクラス……基礎習得レベルにも達しない、最底辺と判断されたらしい。士官学校なら良くて留年、最悪、適正なしとして退学も視野に入れざるをえないレベルだ。
エルスワーズ基地の練度が高くないとは知っていたが、まさかここまで酷いものだったとは……
（……これならティターンズの方がずっとマシだったな）
少なくとも、かつての古巣（ティターンズ）ではこんな練度の奴はいなかった。グリプス戦役終盤ならともかく、平時でも各々がしっかりとした技量と

判断力を備えており、不測の事態にだってある程度は対応できていた。
そう考えると、平和ボケというのは実に恐ろしいものである。
「見ろよ、あのバカ共を。何で怒られてんのかまるで分かってねぇ面だ」
そんな風に思っていると、不意に横合いから声を掛けられる。
視線だけをそこに向けると、何時の間にかそこには背の高い男が立っていた。
リョウトよりも頭1つ分高い身長。軽いウェーブのかかったブルネットの髪を持つその青年は、こちらを見て面白そうにニヤニヤしている。
だが、声を聞いた瞬間――――――リョウトの全身に戦慄が走っていた。

「貴様……さっきの”ネモ”のパイロットか!?」
「……御名答♪」
一瞬早く懐に手を入れ、拳銃を抜こうとする。しかし、眼前の青年は流れるような動作でリョウトの手を掴んでいた。
「おいおい、友軍に手荒い歓迎だなぁ……が、動きが見え見えだ。そんなんじゃ、拳銃抜く前に撃ち殺されちゃうぜ♪」
その口調は穏やかだったが、手首を握る力は万力の様にギリギリと締め付けてくる。
何故オルトロスのパイロットがここにいるかは解らなかったが、今リョウトの目の前にいるこの白人男が只者でない事だけは理解できた。
「なるほど、ニコが推してくるわけだ……ますます気に入ったぜ、お前。うちの隊に来ねぇ??」
だが、パイロットはまるで悪戯好きの子供の様にリョウトを眺めているだけ。危害を加える気は無いらしい。

＊

「リョウト・アルギス准尉……元ティターンズ第６小隊に所属、グリプス戦役時はＲＸ―１１０”ガブスレイ”に搭乗するも、メールシュトローム作戦時に母艦『コロンビア』が轟沈され、エゥーゴに拘束される……その後、再編された連邦軍に復帰し、こんな僻地に飛ばされた……」

基地内の貴賓室で、女性はある男の経歴に目を通していた。

「ふむふむ……やはり撃墜スコアは悪くない。この分だと、この機体を存分に扱ってくれそうだな」

タブレットを操作すると、今度は戦闘機を思わせるシルエットが表示される。ＭＳＺ―００６Ａ１”ゼータプラス”と表示されたそれを見つめながら、女性はクスリと口元を緩めていた。

「さて…残り４８時間。彼はどんな活躍をしてくれるのだろうか……???」

＊

ひと時の平和が終わりに近づく時、戦いの足音は密かに地球圏へと忍び寄る。

かつて忌むべき組織の一員であった青年が『双頭の魔犬』と邂逅する時、誰も気付かないうちに物語の火蓋が切って落とされていた……

宇宙世紀００８８……魔犬（オルトロス）の咆哮と共に、彼等の戦いが再び始まる――――！